

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 会 報

The Bulletin
Japan Branch of the Dickens Fellowship
No. XXII

第22号



発 行
ディケンズ・フェロウシップ日本支部

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

会 報

第22号



The Bulletin
Japan Branch of the Dickens Fellowship


No. XXII
1999

目次

多面的なディケンズを	西條 隆雄	4
支部長辞任の弁	小池 滋	5
『荒涼館』における隠喩としての伝染病	中村 隆	6
ディケンズと軍人	川澄 英男	10
ディケンズ祭	伊藤 廣里	11
ディケンズ・フェロウシップ、ヨーク大会に参加して	木村 英紀	14
一九九八年度総会 研究発表		
司会者から	荻野 昌利	18
エイミー再考 ドストエフスキのソーニヤを通して	小寺 里砂	18
講演『ディケンズと階級』 Professor Andrew Sanders 講演要旨	佐々木 徹	20
一九九九年度春季大会 研究発表		
司会者から	梅 正行	24
逆転の構図 <i>Great Expectations</i> にみる病と癒し	西垣 佐理	25
ピップは自分の人生の主人公になれるのか	松本 靖彦	27
精神療法の観点から		
シンボジウム 「後輩作家から見たディケンズ」	荻野 昌利	29
司会者から	齋藤 九一	30
トロロップから見たディケンズ		
『フィリックス・ホルト』		
エリオットはいかに『荒涼館』を書き直したか	天野みゆき	32
ディケンズとコンラッド HouseholdとEmpire	木村 茂雄	35
論文の電子化について	松岡 光治	37
フェロウシップ会員の論文・著訳書(一九九七〜九)		
会員名簿		42

CONTENTS

The Multi-dimensional Dickens	Takao Saijo	4
On Resigning the Secretaryship	Shigeru Koike	5
Contagious Illness as Metaphor in <i>Bleak House</i>	Takashi Nakamura	6
The Military Man in Dickens	Hideo Kawasumi	10
Visiting the Dickens Festival	Hirosato Ito	11
The 93rd Dickens Fellowship International Conference.	Hidetoshi Kimura	14
Annual General Meeting 1998		
Paper : <i>Moderator</i>	Masatoshi Ogino	18
Amy Dorrit and Dostoevsky's Sonya	Risa Kotera	18
Lecture by Professor Andrew Sanders: "Dickens and Class"		
[Summary]	Toru Sasaki	20
Spring Conference 1999		
Papers : <i>Moderator</i>	Masayuki Toga	24
The Composition of Reversal: Disease and Healing in <i>Great Expectations</i>	Sari Nishigaki	25
Can Pip Be the Hero of His Own Life? A Psychotherapeutic Analysis	Yasuhiko Matsumoto	27
Symposium Dickens in the Eyes of the Later Novelists		
<i>Coordinator</i> : Masatoshi Ogino		29
Trollope and Dickens.	Kuichi Saito	30
George Eliot's Rewriting of <i>Bleak House</i> in <i>Felix Holt</i>	Miyuki Amano	32
Dickens and Conrad: Household and Empire	Shigeo Kimura	35
An Invitation to Uploading Scholarly Articles on the Web	Mitsuharu Matsuoka	37



ディケンズ・フェロウシップ日本支部
1998年度総会

日時：1998年10月3日（土）午後2時より
会場：東京女子大学

1. 総会 (14:00 ~ 14:30)
2. 研究発表 (14:40 ~ 15:20)
司会：荻野昌利（南山大学）
発表者：小寺里砂（京都女子大学）
「エイミー・ドリット再考
ドストエフスキーのソーニャとの比較において」
3. 講演 (15:30 ~ 17:30)
司会：佐々木徹（京都大学）
講演者：Andrew Sanders (University of Durham)
“Dickens and Class”

1999年度春季大会

日時：1999年6月5日（土）午後2時より
会場：中京大学 八事学舎センタービル2階 ヤマテホール

1. 開会の挨拶 (14:00 ~ 14:15)
ディケンズ・フェロウシップ日本支部長：西條隆雄
2. 研究発表 (14:20 ~ 15:20)
司会：榎正行（中京大学）
発表者：西垣佐理（関西学院大学大学院）
「逆転の構図 *Great Expectations* にみる病と癒し」
松本靖彦（東京理科大学）
「ビップは自分の人生の主人公になれるのか
精神療法の観点から」
3. シンポジウム(15:30 ~ 17:30)
テーマ：「後輩作家から見たディケンズ」
司会者：荻野昌利（南山大学）
講師：齋藤九一（上越教育大学）：Anthony Trollope
天野みゆき（広島女子大学）：George Eliot
木村茂雄（大阪大学）：Joseph Conrad

多面的なディケンズを

The Multi-dimensional Dickens

西條 隆雄



一月より日本支部長の職を引き継ぎ、それにともなつて事務局も東京女子大学から甲南大学に移つた。初代、二代支部長の長期にわたるご尽力により不動のものとなつた支部の組織と活動を、継承しより発展させてゆくために私は全力を傾けるつもりである。就任後ほどなく世界有数の日本支部ウェブサイトが出来上がり、これによつて支部の活動状況が、会員はもとよりディケンズに興味を持つていらっしゃる方々に即時に伝わることになつた。また事務局の作業も大幅に簡素化されて、非常によるごんごんでいる。これには、松岡光治氏の献身的貢献があつたことを特に記したい。

ディケンズの魅力は、その豊穡さにある。しばしば「一九世紀ロンドンの特派員」と呼ばれるように、彼の書くものはすべて（想像によつて多少誇張されてはいるが）史実であるのを特徴とする。街路、建物、人々、制度、市場、演劇を丹念に追つてみると、一九世紀ロンドンの姿が再現に近い形で浮かび上がる。作品自体の面白さはいうまでもないが、作品中の個々の事象すらが興味をとらえて離さないのである。

作家としての魅力に加え、雑誌編集者、速記者、自作朗読者、演劇家、更正施設の設計・管理者、競歩大会優勝者としての多芸多才な側面にもまた、興味の種は尽きない。赤銅色に日焼けした船乗りらしき風貌、文人よりは行動家に見える、当時の人々には「きらきら輝き休むことのない眼は、異常なまでの敏感さと知性の鋭さを示している。街中でディケンズと知らずに出会つたなら、一流銀行の次長、外交陰謀の秘密工作員、老獪な弁護士、あるいは旅一座の団長を思わせたであろう」といわれる。また、「法曹界入りをしていれば、場面の再現力と合わせ、正確な特徴とさまざまな構成要因の關係を聴衆に伝える力においては、彼に匹敵する人はいない。これは、さまざまな法廷でじつに貴重な能力となつたであろう」と惜しまれている。作家としてのみならず、多面的なディケンズ像にも思いを馳せ、彼の魅力を掘り起こしてみたいものだ。

今年、ディケンズ没後百年を契機に日本支部が設立されて、ちょうど三〇年になる。現在、会員は一七〇名をこえ、作家に対する興味および研究活動は質量ともに大きく向上した。一方では“Critical Assessments”、“Casebook”、“Dickensian”などに論文が掲載され、海外で開かれる学会には参加が相次ぎ、英米の主だったディケンズ学者が日本を訪ね、講演をして下さつている。しかしこうした誇らしい活動も、日本支部があり、支部の活動を通して会員が相互にディケンズ理解を深め合うことができたおかげであると思う。三〇年前に支部設立にご尽力いただいた一六名のなかには、すでに物故者となられた方もいる。私たちの記憶の確かなう

ちにその方々のお名前をここに記し、高邁な思いと努力に対して深い感謝の意を捧げたい。

ディケンス・フェロウシップ東京支部設立発起人

(一九七〇年二月)

青木雄造 安藤一郎 市川又彦 入江勇起男
内山正平 大庭 勝 小池 滋 桜庭信之
鈴木幸夫 高見幸郎 田辺昌美 中島文雄
宮崎孝一 山田和男 山本忠雄 米田一彦

支部長辞任の弁

On Resigning the Secretaryship

小池 滋

宮崎孝一初代日本支部長の後任として、しばらくの間二代目支部長の仕事をやらせていただきました。前任者の宮崎先生がレールを敷いて、いろいろな点で先例を確立して下さったので、私としてはその上で事故を起こさぬよう、安全運転をすればよかったです。だから、私はほとんど苦労も心配もなく、気楽に構えることができました。また、多くの皆さんから自発的な協力の手をさし伸べていただきましたので、とても助かりました。

私が頭を悩ましたことといったら、毎年の秋、私の大学

か、あるいは他の東京の大学で開かれた恒例の総会の後で、どこの呑み屋で二次会をやるか、といった程度のことでした。ディケンスの作中人物の名を頂戴するという僭越な真似をするならば、私はさしずめフォン・シユヴィレンハウゼン男爵と名乗ってもよいでしょう。

(こんなことは言わずもがな、ですが、これは『ニコラス・ニクルビー』の中に挿まれている短い物語に登場するドイツの貴族です。いかにもドイツ語風に聞こえますが、スプリングを見れば、Swilenhansen つまり「がぶ飲みする家」という意味になる冗談です。)

能天気なことをやって来ましたが、人間年齢には勝てません。私も二〇〇〇年三月には六八歳、東京女子大学を停年で去ることになっていて、その後はもう一切の大学とはおさらばすることになりました。というわけで、私の大学の研究室に日本支部事務局を置くことができなくなりますので、しばらく前から、支部長辞任の意向を洩らし、次の支部長を選んで下さるようフェロウの皆さんにお願いしていました。

幸いして西條隆雄さんが後任を引き受けて下さることに決まり、事務局の仕事も、会報編集その他の仕事も、完全に新しい体勢に受継がれました。私としてはほんとうに安心「今までそんなに心配して来たのかい？」という声が、どこからか聞こえて来るような気がしますが、で、これからは一人のフェロウ・ディケンズアンとして、微力ながらも、できることをやって行きたいと思っております。もちろん、シユヴィレンハウゼンへご案内する嬉しい仕事も含めて。

『荒涼館』における隠喩としての伝染病

Contagious Illness as Metaphor in *Bleak House*

中村 隆

ブリッグズによると、一八四八年の「公衆衛生法」が成立した前後、人道主義者や政治家のみならず、詩人や芸術家もまた「衛生に関する理念」によって大いに啓蒙を受けているが（*Victorian Cities* 20）。ディケンズもその一人であり、それが色濃く現れているのがディケンズの『荒涼館』（一八五二年）である。しかし、たとえチャドウィック的な「衛生観念が時代を規定した」にせよ（*Age of Improvement* 335）、公衆衛生の思想は一枚岩ではなかった。例えば、疫病の伝播形態をめぐる議論を取ってみても、チャドウィックの有名な「悪臭説（“miasmatic”）」は支配的にはならず、諸説が混在していた。そのことが示される事例が少なくとも二つある。一つは、メイヒューの「下水ハンター」と題する記事である。下水ハンターとは、下水道の泥の中から、銅釘、鉄くず、コイン、ロープ、骨などを拾い、売る人たちであり、メイヒューは「下水ハンターたちは、時間の大半を下水から生

じる有害な蒸気の中で過ごしているが、奇妙なことに、彼らは頑健でたくましく健康的で、たいがい血色がすこぶるよい」（*Mayhew* 152）と述べ、疫病の原因は悪臭そのものであるとするチャドウィック一派の悪臭説を否定している。

もう一つの事例は、一九世紀の有力な医学雑誌『ランセット』の一八五三年の記事で、疫病の中でも特に、コレラを取り上げ、「コレラの原因に関して、我々は、様々な憶測の渦に巻き込まれている」と述べる。記事によると、コレラの原因として、悪臭のみならず、黴、昆虫、電氣的な不調、新鮮な空気の欠如、病人の排泄物、など少なくとも六つの説があったことがわかる（*Wood* 119）。つまり、疫病因果論全体の言説に占める度合いに関しては、チャドウィックの悪臭説は、六分の一の比重しかなかった。

このような公衆衛生における混乱した病因学（“etiology”）の状況を、「一八五二年の寓話」（*Butt* 179）と称された『荒涼館』は反映している。例えば、疫病の伝播形態に関する二大学説であった悪臭説と接触感染説は、小説における汚濁の中心となる“Tom-all-Alone’s”を描いた第46章の冒頭部に現れている。

しかしトムは仕返しをする。風ですら彼の使者となり、この暗黒の時間に彼のために働く。トムの穢れた血の一滴は、必ずや、どこかに接触し、伝染する。（中略）

トムの一粒のヘッドロが、トムが生活している場所の一立方インチの死をもたらず空気が、猥褻なトムと、ト

ムの墮落が、彼の無知と邪悪が、トムの子深い野蠻さが、すべて復讐を遂げるだろう。それらは社会のすべての階層をすり抜け、この上なく傲慢な者へ、そして限りなく高貴な者へと伝わっていく。汚し、略奪し、むしり取り、トムは間違いないく、復讐を果たす。(Bleak House 568)

この段落を貫くのはまさにチャドウィック的な思想である。チャドウィックは「腐敗物質から生み出される汚れた空気のために、疫病、風土病、そして他の様々な病が、主として労働者階級の中に生じ、悪化し、広まる。」(Chadwick 422)と述べる。つまり、彼の公衆衛生の背後にあったのは、貧民を救うという大義よりも、むしろ、そうしないと、富める中産階級の人間が巻き添えを食い、共倒れするという危惧の觀念であった(Disease, Medicine and Society 33)。「荒涼館」の引用部は、スラムに生じる害悪が社会全体に広がっていくということを暗示する点で、チャドウィックと軌を一にするが、相違点は、病または穢れの伝播形態に関する説明である。トムの使者である「風」、死をもたらす「気体」などの表現は、明らかに、悪臭説を代弁するものの、その一方で、病には種がありそれが接触を通して伝染すると考えた接触感染説への明確な言及もある。「穢れたトムの血の一滴」や「トムの一粒のヘドロ」がその「種」に相当する。

伝染病の原因をめぐっての混乱した状況は、小説の語り手であるエスタにおいても現れる。小説における疫病は天然痘であるが、この病は人から人へと「接触」を通して感染す

る。まず、スラムの孤児ジョーが天然痘に冒され、ジョーの世話をした侍女のチャリーが罹患する。チャリーの病が癒えると、今度は、看病していたエスタが倒れる。しかし、接触感染説に忠実なエスタは、自分がいつ天然痘に冒されたのかを語る時、悪臭説に傾く。エスタの言葉に従うなら、彼女が「それにかかった(Bleak House 400)」のは、荒涼館の外に出て、空を見上げた瞬間である。この直後、彼女は病に臥したジョーを訪れ、部屋の不健康な悪臭に驚き、「その場所の空気はいつそう息苦しく、不健康な、異様な臭いがした」と記している。つまり、エスタの語りは知らず知らずのうち疫病の原因をめぐる二つのイデオロギーの対立の中に封じ込まれているのである。これは『荒涼館』が、チャドウィックの公衆衛生の思想を単になぞる小説ではなかったことの一つの証しである。

二

次に考察するのは、エスタの罹る天然痘の象徴的意味についてである。ただし、天然痘smallpoxという具体的な名辞は小説において一度も使われていない。具体的な病名が明かにされないのは、ディケンズにおいては常套的であるといえ、彼にあっては病気は現実というよりも、プロットに大きな転換を与える一つの手段であった。例えば、『ドンビー父子商会』でポールは正体不明の病で夭折し、『デイヴィッ

ド・コパフィールド』ではドーラは原因不明のまま衰弱を始め、あつという間に死ぬ。ディケンズにおいて病氣と死は一つのプロットを終結させ、新たなプロットを導入する方策でもあった。しかし、『荒涼館』の天然痘は二つの点で特異である。一つは、天然痘は具体名が明示されないものの、天然痘と特定しうる状況は明示されていることであり、二つめは、この病は死をもたらさないことである。天然痘は死ではなく、ヒロインのエステに癩痕をもたらし、彼女と医師のウッドコート間の結婚へ至るプロットを作り出している。

ところで、トム・オール・アローンズから始まる『荒涼館』の天然痘は、穢れたスラムを象徴する病氣のほずであるが、一九世紀中葉のスラムを象徴する恐ろしい病といえ、**「貧者の病」**と呼ばれたチフスや**「青い恐怖」**と畏怖されたコレラであり、天然痘ではなかった。むしろ天然痘は、一八〇三年に、「王立ジェンナー協会」が発足して以来、致死率が劇的に低下しており、一九世紀半ばまでにはいわば安全な疫病に変わっていた（Benefit 276-77）。ではなぜ、エステの病はスラムと連想されるチフスやコレラではなく、さらに一九世紀最大の死の病であった結核ではなかったのだろうか。ソングは結核が「美化された死」をもたらすロマンティックな病だったことを指摘しているが、エステは死んで悲劇的に美化されるヒロインとしてではなく、喜劇の枠の中で結婚に至るヒロインとして造型されたために、死をもたらす結核はプロットから排除されたと考えられる。同様に危険きわま

るコレラやチフスも回避された。とりわけ、コレラやチフスは劇症を伴い「人間の尊厳を奪う死」をもたらしたために、徳性の高いエステにふさわしい病氣ではありえなかった。しかしそれにもかかわらず、エステの罹る病は、伝染病であることが是非とも必要であった。なぜなら、チャドウィック的な公衆衛生の思想を少なくとも一面において標榜するこの小説は、穢れたスラムが恐ろしい伝染病の巢であり、その伝染病は階級の壁をすり抜け、社会全体を冒すという象徴的意味を持たなくてはならなかったからである。ただし、エステが美化されるヒロインであり続けるためには、彼女の病は、穢れを直接的に惹起したり、死をイメージさせる伝染病は不適切だった。そうすると残る伝染病は一つしかなく、それは、一九世紀前半の種痘の普及により安全な伝染病に転じていた天然痘である。作者は、さらにこの病の特性である顔に癩痕を残すという性質を効果的に使い、エステのあばた顔を容認できるかという問いをウッドコートに突きつけ、彼の愛の真実を確かめる試金石とし、エステのみならず、ウッドコートの徳性を計量する手段としている。ソングは、病は「自己を超越する」機会を与えると述べ、またベイリンは、病氣や病室が、恋人同士を結びつける橋渡しとなることを指摘しているが、天然痘はエステとウッドコートにとって、結婚という物語の大団円に飛躍するための「通過儀礼」の場を提供したのである。さらにいうと、劣悪な衛生環境を象徴する「伝染病」に罹患し、あばたという癩痕によって、伝染病の恐怖

を自己の中に閉じこめるエスタの行為には、明らかに「原型 (“archetype”)」としての受難のイメージが重ね合わされ、彼女のおぼたはキリスト教神学における「聖痕 (“stigmata”）」を道体験している。ディケンズ文学に類出する犠牲者として描かれるロバインの存在は、同じく時に美化される受難のイエスを擁護しており、この文脈で見ると、結婚で終わる『悲涼館』は悲劇の相貌を呈している。小説が全体として陰鬱な印象を与えるのはこのためでもある。

本稿は日本英文学会第11回大会での筆者の発表『『悲涼館』と凶暴病 公衆衛生と隔離と』をさらに再構成したものである。

Works Cited

- Bain, Miriam. *The Sickroom of Victorian Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Briggs, Asa. *The Age of Improvement 1783-1867*. London: Longman, 1959.
- . *Victorian Cities*. 1963, Hammondsworth: Penguin, 1990.
- Butt, John, and Tillotson, Kathleen. *Dickens at Work*. London: Methuen, 1957.
- Chadwick, Edwin. *Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain*. Ed. M. W. Flinn. Edinburgh: Edinburgh UP, 1965.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. Ed. Andrew Sanders. London:

Dent, 1994.

Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. New York: Dover, 1968. Vol. 2.

Poovey, Mary. *Making a Social Body British Cultural Formations, 1830-1864*. Chicago: U of Chicago P, 1995.

Porter, Roy, ed. *Patients and Practitioners*. Cambridge: Cambridge UP, 1985.

———. *Disease, Medicine and Society in England 1550-1860*. Second Edition. 1993; Cambridge: Cambridge UP, 1995.

———. *The Greatest Benefit to Mankind*. London: Harper Collins, 1997.

Wood, Anthony. *Nineteenth Century Britain 1815-1914* Second Edition. London: Longman, 1982.



ディケンズと軍人

The Military Man in Dickens

川 澄 英 男

『アメリカ紀行』を読んでとりわけ印象に残るのは、数少ない賛辞のうち、とくにウェストポイントに与えられた賞賛の言葉である。

シエーカー教徒の村を訪れ、その不自然なまでに禁欲的な生活に失望したディケンズは、シエーカーズのドグマに従えば、「日々はただ墓への細々とした道に過ぎなくなつてしまふ」とその偽善的な生き方を強く非難し、早々に村を後にする。その反動なのだろうか、ニューヨークへの帰路ディケンズはウェストポイントに立ち寄り、なんとそこに二泊もしている。帰国を翌日に控えてのことであり、シンシナチやセントルイスなどの主要な都市でさえ、せいぜい二日から四日の滞在であつたことを考えると、その「長さ」には驚かされる。しかもディケンズは、ただ単に「二泊した」という代わりには“... at West Point, where we remained that night, and all next day, and the next night too.”と記している。ウェストポイントはディケンズに並々ならぬ印象を与えた町だつたようである。この麗しの地、ハドソン川の水面の輝きを眼下に、深く緑に包まれ遙か彼方を見渡すアメリカ陸軍士官学校「士官学校が建つ地としてこれ以上美しく、それにふさわし

い所はない」とディケンズは断言している。六月の妙なる風光と威厳に満ちた陸軍士官学校が一つに溶け合つて、ディケンズの感性を捉えた。しかしここまでディケンズを感動させた士官学校とは、ディケンズにとつて一体何だったのであるうか。

アメリカという異国に行く旅はストレスに満ちた旅であつた。この不便極まりない、学び観察しなければならぬという半ば義務感を帯びた旅をようやく終えてカナダ、即ち「イギリス」側へ入ろうとしたディケンズは、まずナイアガラ瀑布を訪れる。フォースターへの手紙には、その時の気持ちを表わすのに、日付の下の発信地を示す、ナイアガラ瀑布!!!（イギリス側にて）の「イギリス」の下に、なんと一〇回のアインダーラインを引いている。やつと「本国」に戻れたという大いなる喜びが伝わってくる。同時に、それまでのアメリカ国内の旅がいかに異質のものであつたかが、自ずと理解される。そして瀑布を見た時の感動とこつした気分の高揚からなのだろうか、その時たまたま一緒に居合わせた二人のイギリス軍士官に言及して、“(ah! what gentlemen, what noblemen of nature they seemed)”と我知らず感動している。ディケンズの目に入った対象は無数にあつたはずだが、ことさらイギリス士官の姿がディケンズを捉えるのである。

ナイアガラを訪れるにあつて、「今朝パツファローからここへ来る時ほど興奮していたのは生まれて初めてのことでした」とフォースターに語っているが、圧倒的な創造の奇跡を

前に、精神的に異常な興奮状態を体験しているデイケンズが、いわば心的に無防備な状況の中で発する士官への賛辞だけに、なおさらデイケンズの心の一層深いところにあるものが表出したものといえよう。心の奥に大切にとつておいたポーツマスの、そしてチャタムのかげりのない幼少の頃の思い出 規律正しく行進する将兵、颯爽と練り広げられる攻撃と防御の訓練、士官の子供たちの興じる戦争ごっこ、そしてギヤツヒル邸への小旅行、心行くまでの読書、広がる青い海を意識の底で想起していたに違いない。実に「ナポレオン戦争」から国土を守り、その後のイギリスの大英帝国としての発展を可能にしたのは、正にこの海軍であり、軍人の力だったのであるが、デイケンズの幼少期に受けた「インプリント」が、図らずもナイアガラで、「自然の貴族」を思わせる士官の姿にその対象を得た瞬間であった。

アメリカ力を旅するデイケンズの目に多くが批判的に映らざるを得ない状況の中で、ウエストポイントに注がれる熱い眼差しとそれに対する異例なまでの賞賛は、デイケンズがウエストポイントに、アメリカもイギリスもない己の心の一部を見たからなのである。麗しの士官学校、自然の貴族と見える士官たち、カナダ各地で受ける軍高官からの厚いもてなし、デイケンズの劇を見に集まる威風堂々たる正装の軍人たちが短い『アメリカ紀行』ではあるが、何故か軍入のイメージが読む者の心に残るのである。

デイケンズ祭

Visiting the Dickens Festival

伊藤 廣 里

私は長年にわたって、デイケンズ祭を一度は見物したいものだとして願望していた。現役時代はなかなかその時間が持てなかった。

二年前に私は大学を定年退職した。それで自由な身となり、時間的余裕も出来たので、本年の六月、デイケンズ祭を見物するためロチェスターへおもむいた。

ロチェスター駅に着いた時、私は驚嘆した。ヴィクトリア朝時代の衣装をつけた女性たちが、駅頭から町の中心部へと、歩いてゆくのである。

道路には車は一台も走ってはいない。それは完全なる歩行者天国に変貌しているのである。

街路の低空には、ブルーの布地にデイケンズ・フェスティヴァルと白い文字で、クッキリと書かれた横断幕が吊ぶらさされていた。

その幕の下を、ヴィクトリア朝風のコスチュームをつけた女性や男性が気取りに気取って歩いてゆく。デイケンズの作品群に登場する多くの性格も、歩いてゆくのは言うまでもない。

警察隊、消防隊、バグパイプ隊が、笛を吹いたり、ドラム



街路上の横断幕 伊藤撮影

を叩いたりして、堂々と闊歩してゆく。ロチエスターのフェ
ロウシップ会員も、そのプラカードをかざして進んでゆく。
店屋の通り側の二階の窓から、見物客が首を出したり、ま
た両足を投げ出したりしてそのパレードを眺めている。

古城の下までそのパレードは続く。

古城下の広場には沢山の模擬店が出ている。

店から、フラ
イドポテト
やウインナ
ーやドリン
クを求めて、
見物客の多
くが広場の
芝生の上に
座って食べ
たり飲んだ
りしている。
時々、こ
ぬか雨が降
ってくる。
彼らは少し
も慌てない。
私は帰途、
タウン・セ
ンターに入



バグパイブ隊のパレード 伊藤撮影

にうたう。 歌はみんなみんな私の知らない歌ばかりだ
が、私は何故か伝統の素晴らしさというものを、ひしひしと
感ずるのであった。

雨が本降りとなる。

私は傘をさしてロチエスター駅に向かった。ディケンズ祭
を見物してから、その近郊やロンドンに帰る人々で駅頭は物

つて、『デア・
オールド・バ
ルズ』という
コミカルの寸
劇を見た。
夫々、昔の衣
裳を着た一人
の中年男性
と、二人の中
年女性が演ず
るのである。
その劇の途中
で、役者たち
は楽しい昔の
歌をうたう。
すると見物客
もそれに合わ
せて懐かしげ

凄い雑踏を呈していた。
帰りの汽車の中で、ディケンズは生きつづけているのだと私は痛感するのであった。



パレードの見物客 伊藤撮影

沿線の濃い緑の繁みの中で、ニワトコが白い花をつけている。またフジウツギの筒状の紫色の花も私の目に入ってくる。

法要が、ウエストミンスター・アビーのポエツツコーナーで行われた。

私はすでにディケンズの墓参は済ませてはいたが、ロンドン大学、バークベック・コレジのマイケル・スレーター先生の勧めもあつたので、再度出掛けてその法要に出席する榮に浴した。

出席したディケンズは、およそ八〇名ほどであり、スレーター先生の親友、トニー・ウィリアム先生が私の隣りの席に坐られ、度々暖かい言葉を私にかけて下さった。その式のメインは、ポーツマス支部のクラレンス・ジャクマン氏の講演であつた。
氏はディケンズの多面性、即ち小説家・ジャーナリスト・俳優・社会改良家等としての面を静かに語られた。氏は老



煙突掃除夫に扮した少年と筆者 伊藤撮影

イケンジアンというお方であり、その講演の内容は堅美であった。

講演終了後、ギャッツビル校の生徒さんのコーラスや、墓前への献花があって、その法要は終わった。簡素なものであった。

私がアビーの外に出た時、もうゆうに七時をまわってはいたと思うが、ロンドンの空は真昼のようにまだ明るかった。アビー西門前の大通りは、車や観光客の群れで輻輳ふくごうしていた。

私は皆と別れてから、何処にも寄らず、タクシーを拾い、至福な気持になって、私のロンドンの宿であるマーブルアーチのカンパニールランドホテルに向かった。 合掌

(平成十一年八月三十日稿了)



ディケンズの墓（ポエッツコーナー）
伊藤撮影

ディケンズ・フェロウシップ、ヨーク 大会に参加して

The 93rd Dickens Fellowship International Conference

木村英紀

ヨーク市の The University College of Ripon and York St. John を会場として、七月一六日から二二日にかけて第九二回ディケンズ・フェロウシップ国際大会が開催された。ヨーク支部が主催したもので、参加者は約一三〇名。イギリスの各支部からの参加者が大部分で、他にアメリカ、オランダ、フランス、デンマーク、イタリア（フェロウシップの支部はないが）、南アフリカ、日本からそれぞれ数名が参加した。

私事にわたるが、私の勤務校はまだ夏休みに入っており、前期試験にかかる日程ではあったが、思い切って参加してみた。たった一枚の案内状ではあったが、日本支部の春季大会への案内状に同封されていた紙片が、日々校務と授業に追われていた私には、十分に魅力的で抗しがたいものであったのである。このような国際大会の案内状が送られてきたのは初めてのことだと思うが、案内状を送って下さった支部の関係者の方々には御礼申し上げたい。とはいえ、申し込みの締め切りが六月一日だったので、五月中旬には参加するかど



Dotheboys Hall 撮影 西條隆雄

うかの決断を迫られたし、参加費の送付や旅程の手配には多少の手間がかかった。全くの出不精で、校務以外にはあまり海外に出たことがなく、イギリスにも今回が初めてという私にとっては、かなりの緊張感を強いながらも参加であった。

しかし、実際に会場の大学に着いてみると、ヨーク支部の方々の暖かい歓迎を受け、また、寮の一室に乱雑に旅装を解いた後に、ハイ・ティーを頂きに大学の食堂（日本の大学の学食とは違い、大きなレストランとでもいったもので、バーも食堂の隣にあったのが嬉しかった）に行くと、周りの参加者が気軽に声を掛けてくれて、緊張感が徐々に薄れていった。

この『会報』の第一九号で、北條先生がポーツマスでの第九〇回大会

に参加したときの印象を書いた文章でも述べられていたので重複は避けるが、私も参加してみればじめて、イギリスの Dickens Fellowship のメンバーがどのような人たちなのかを知って、少々面食らった。参加者のなかで研究者は少なく、大半は老齢のディケンズ愛好者たちであった。現役の仕事から引退しているという余裕からだろうが、本当に心やさしきディケンズファンたちで、かれらのやさしい心配りに随分と救われたものである。しかし、かれらの多くが本物の愛好者たちで、年季が入っている分、私のような中途半端に、しかも外国文学としてディケンズを読んでいる者には及びもつかないような知識や理解力、感性がある。そのことを思い知らされたのは、初日の夜に催された“Welcome and Entertainment by the (unique) Dickens Readers”である。要するに、リーディングであるが、六十歳代から七十歳代前半のディケンズファンたちが、凝った衣装を身に付け、声量豊かに、しかも感情を込めて、いくつかの作品の名場面を「読む」わけである。三日目の夜には、プロの俳優によるリーディングがあったが、これと較べても遜色のないような見事な出来であった。

五泊六日、ほとんどの参加者が寮に泊まって、八時の朝食にたっぷりと時間をかけて会話を交わすことから始まって、ゆつたりとした休憩時間はあるものの、毎日夜の十時までプログラムが組まれているせいか、三日目くらいからは参加者が一つの大家族というような雰囲気になっていくのが、学会らしくなくて、心地よかった。日本支部からの参加者が他に四人もいて、殊に支部長の西條先生には何くれとなく面倒を

見て頂いたので、そう感じたのかも知れない。

こう書く。大会が全くの親睦会のような印象を与えるので、「学術的」な側面にも触れておかなければならない。講演は六つあって、それぞれが興味深いものであった。まずは、*The Dickensian*の編集長でもあり、一昨年来日して日本支部の総会でも講演をして我々にもなじみの深い、ケント大学の Malcolm Andrews 教授の講演である。氏は、「Dickens Serialization and the Drip-feed Experience」と題して、「ディケンズの月刊分冊あるいは雑誌への連載という作品の発表形式と、それが読者にどのように受け止められ、どのような効果があったかをかなり詳しく論じられた。次は、これも有名なロンドン大学の Michael Slater 教授の「Dickens and the Poor」と題する講演で、「ディケンズは作家の社会的責任としてさまざまな問題を取り上げたが、彼の貧困に対する恐怖は、同時に貧困から起こる革命に対する恐怖でもあって、根底には現状を何とか維持したいという願望があった」という指摘は、さまざまな作品に触れながらのものだっただけに説得力があった。

また、*Nicholas Nickleby* 中の「Dotheboys Hall」の校長のモデルとされた William Shaw の四代目の孫にあたる Ted Shaw 氏の講演は、ヨーク大会ならではのものではあった。前日のバスを使つてのツアーでもガイドを勤めた氏は、小説の中でモデルとされた Bows Academy の教学内容や生徒の質、さらにこの学校の生徒だった人々の手紙を紹介しながら、「Dotheboys Hall」はまさにフィクション以外の何ものでもないことを訴

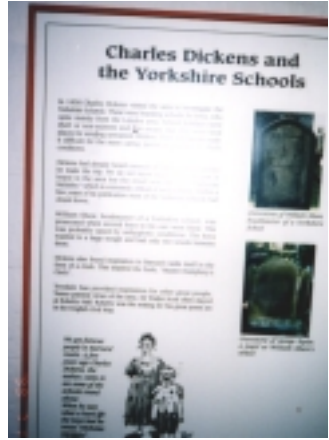


Dotheboys Hallにて西條支部長

えた。

アバディーン大学の講師である Paul Schickele 氏は、周知のように *The Oxford Companion to Charles Dickens* を編集した人物である

が、一九九三年にこの本を企画してから出版に漕ぎ着けるまでのさまざまな苦労やそれまでの類書とどのように異なるコンセプトで編集したのかを事細かに話してくれた。最後に、二日目の総会で新しくフェロウシップの会長に選出されたダラム大学の Andrew Sanders 教授は、「What makes Dickens modern?」と題して、「ディケンズが一八三〇、四〇年代の大きな変化の時代にどのような意識を持って作品を書いたのかを跡づけながら、その苦闘の過程が現代的な意義を失っていないことを強調した。アマチュアでかつ老齢な人々が多い聴衆に対して、アカデミックな講演をするというのは、かなりの苦労を伴つと思われたが、講師の方も概ねユーモアを所々に交えて、できるだけ硬くならないようにと工夫していたし、聴衆の方もツボの所では大いに笑い、話が終わると、軽妙なコメントや質問の形で自分の意見を開陳したりと、日本の研究発



Bowes Museum 撮影 木村 英紀

表などはかなり違う印象を受けた。他に、ツアーが三回あった。一つは、ヨークの中心街のツアーで、一四世紀に建てられたというギルドホール

ルの奥にある理事会室のような部屋や、The Mansion House と呼ばれる市長公舎（市長夫妻も挨拶に見えられた）の由緒ある応接室など、一般の観光客では決して見ることができないような所まで案内してもらった。また、カンタベリーに次ぐヨーク大聖堂の隅々まで案内するツアーもあった。四日目には、ほぼ一日を費やしたヨーク北部へのバス・ツアーがあり、幸いにも晴れ上がった天候のもと、ヨークシャーの美しい田園風景を堪能しながら、*Nicholas Nichelby*の中の舞台となった場所を訪れた。グレート・ブリッジを始め、*Bowes Academy*や、その近くの教会（墓地にはウィリアム・シヨアの墓やディケンズがインスピレーションを得たとされる生徒の墓がある）、バーナード城近辺など、ディケンズが一八三八年に行った取材旅行の足跡をたどるといったものであった。

散漫な文章ではあるが、以上がプログラムの概要である。お金のことを書くのは野暮というものだろうが、五泊六日で



大会の最後のプログラム“Celebration Evening” 撮影 木村英紀

宿泊費、食事代、ツアー代金等々すべてを含めて、約三三〇ポンドであった。日本から参加することを思えば少々高いが、私の実感としては、これだけの盛り沢山のプログラムで、しかも家族的な雰囲気のおかげでさまざまなディケンズマンと話をすることができ、なおかつ「実物」を見ることができるといって、このような大会にしてはそれほど高くはないと思う。せめて五、六年前に参加していれば、という思いもあった。なお、来年の大会は、口チエスターで開催される。

Great Expectationsの舞台をめぐるツアーが企画され、講演もこの作品を中心として予定されているようである。若い研究者諸氏ほど、このような大会に参加するのは意義深い体験となると思う。

一九九八年度総会

Annual General Meeting 1998

研究発表

司会 荻野昌利

今回の大会には、小寺里砂氏（京都女子大学）を煩わして、「エイミー・ドリット再考」と題する研究発表をいただいた。『リトル・ドリット』とドストエフスキーの『罪と罰』のそれぞれのヒロイン、エイミー・ドリットとソーニャ・マルメラドヴァの自己犠牲的精神を比較文学的に考証したもので、外国文学からのディケンズへの影響という従来のパターンを逆転させ、ディケンズがいかに後世代の外国人作家に影響を及ぼしたかを基軸に考察しているところが、司会者には従来のディケンズ・フェロウシップにはないユニークで新鮮な形の発表に思えた。



エイミー再考 ドストエフスキーの

ソーニャを通じて

Amy Dorrit and Dostoevsky's Sonya

小寺里砂

ディケンズとドストエフスキーの比較論において『リトル・ドリット』が熟を込めて語られることはまずない。その理由の一つに、この作品には後者の創作活動に影響を与えたと思われる人物像がないという見解が長年あつたからである。しかし、『罪と罰』の女主人公ソーニャはエイミー・ドリットのドストエフスキー版に他ならないと私には思われる。本発表では、両者の類似点を逐一検討するよりも、エイミーの反射鏡としてソーニャを読み解くことにより、ディケンズの世界のエッセンスを明らかにすることを目的とした。

両ヒロインの家庭環境は酷似している。とりわけドリットとマルメラドフの二人の父親は幾つもの共通項をもつて、完全に逆転した親と子のロール・プレーを演じ、彼女たちに庇護どころか全家族の負担と貧困を押し付ける。このような重荷を背負う彼女たちの身体は、等しく「小ささ」を特徴とする。それは子供のイメージと連結し、清純無垢さや犠牲者としての哀れさを強調する一方で、従順、謙虚、自己犠牲的精神、等の彼女たちの内面的特質を象徴するのだ。そのようなまさしくヴィクトリア時代の女性に要求された美徳を持つ

エイミーにおいて、それゆえ極端なまでに彼女の「小ささ」は強調される。だが、それは「奇形的」という形容詞をもつてのちの批評家たちに言及されることにもなった。エイミーの体は彼女の美德の表象となる反面で、彼女の欠陥ともなったのである。ソーニヤがそれを裏付けている。ドストエフスキーはソーニヤに娼婦という職業を与えることによって道徳上の不具者とした。ドストエフスキーの世界は、道徳的奇形をもつて、異常なまでに小さく子供っぽい姿をしたエイミーのカウンターパートを提示し、その行き過ぎた抽象性を排除したのである。

娼婦ソーニヤは、都市社会の底辺にもがく、踏み躪られた弱く貧しき人々を代表しうる存在となり、かつ犠牲の大きさを明示する。ディケンスがそのようなテーマと連想における有効性を意識していたからこそ、エイミーにもfallen womanの影が寄り添つたことになったのであろう。だがモリリテイの語において、fallen womanとunfallen womanとの間にディケンスは明確な境界線を引く。エイミーの幼い肉体は、象徴的にも実際においても彼女がヴィクトリア時代の規範から逸脱する危険を防いでいる。しかし同時にそれは、「小さな」肉体という保護の殻の中にある彼女のイノセンスそのものが作る限界を露呈することにもなっているのである。

ドストエフスキーはさらに、主人公ラスコリニコフがかつて愛した少女、即ち狂信的で身体的欠陥をもった少女の面影をソーニヤに重ねる。不具の娼婦ソーニヤのハンディキャップは、極端に小さな体をした「マーシャルシー監獄の子

供」エイミーが背負っている身体的及び社会的ハンディキャップなのである。ドストエフスキーがディケンス文学の特徴とした「正しく清く、だが無抵抗なまでに従順で、エキセントリックで、踏み躪られ虐げられた人々」に、我々はドストエフスキーのソーニヤが属することを認め得るだけでなく、不具の娼婦という要素を持つているからこそ彼女をエイミーの延長線上に確実に捉えることができるのである。

このようなエイミーとソーニヤの比較は、両作家の世界に共通の中心的テーマと深く関わる。その一つである自己犠牲のテーマにおいて、『罪と罰』ではソーニヤに加えドワーニヤという女性が核となるが、エイミーの自己犠牲の性質は、この両者のそれ（特に後者の自己犠牲の特質）をもつて顕らかにされ得る。エイミーの心理作用においては、自己のアイデンティティ認識をポジティブに高める唯一の手段として自己犠牲の行為は機能している。ソーニヤが自己犠牲という行為をもつて他者のみならず自らの救済に向かつて成長していくのに対して、エイミーは他者を回復させる同じような力を示しながら、自己犠牲的行為への自ら動機付けた欲求ゆえに満足感の中に埋没しているのである。さらに、ドワーニヤが自己欺瞞の罫に掛かったように、犠牲になつた子供のイメーヂを強く押し出すエイミーは自らその自己犠牲が仕掛けた自己憐憫の罫にはまってしまうのだ。

彼女を哀れみの対象に位置付ける自己犠牲の特質は、親子のテーマにも繰り返される。『罪と罰』の父親は息絶える寸前に、犠牲者たる娘ソーニヤにスポットライトを当てるの

みならず、己のエゴを放棄することにより娼婦ソーニヤが「飽くことなき同情」と同義語となり、悩める者や罪人たちにとって許しの媒介となることを示す。だが一方『リトル・ドリット』の父と娘の場面は、親の無責任さのために不当に犠牲になり決して省みられることのない子供の姿を印象付けることに終始し、その子供への不憫さが主旨となっている。そこには作者ディケンズの少年時代の記憶の影響がある。ディケンズの子供時代へのオブセッションは、愛と復活のテーマにも反映している。復活のシンボルとしてのソーニヤがシベリアの囚人たちを導くともしびとしての作用を持っているのに対し、エイミーはマーシャルシーの囚人たちの同情と賞賛の的となる。結局、ディケンズの子供時代へのオブセッションは、エイミーをして自分の真価を証明するため、同情を得るため、自己犠牲を必要とするキャラクタへと至らせたのである。親の無責任さを糾弾し、犠牲になっている子供に目を向けることを訴え、そして他人の同情を渴望してやまないディケンズの一人の声が、彼の作品に現われる子供たちの背後に聞こえる。エイミーはそのようなディケンズの思いを、オリバーやデイヴィッド以上に正当化してくれるキャラクタであったのではないだろうか。同じ特徴、要素を分かち合いながら、ソーニヤがエイミーとの間に示したずれば、このようなディケンズの特質を浮き彫りにするものであり、ソーニヤという人物像はディケンズにとってのエイミーの真価を問い直す。

講演

『ディケンズと階級』 “Dickens and Class”

by Professor Andrew Sanders

司会 佐々木 徹

ダラム大学教授で *Charles Dickens: Resurrectionist, The Companion to A Tale of Two Cities* などの著作、および *The Dickensian* の編集でお馴染みのサンタース先生は、外見もディケンズの小説から出てきたような如何にもイギリス人というところが何とも嬉しい。とにかくしゃべりだしたら止まらない人で、午前中の有志を相手のセミナーでは溢れ出る博識をもつて参加者一同を圧倒し、おまけにその怪力を講演にも持続させたのだからすごいとしか言いようがありません。一時間でストップするように釘をさしておいたにもかかわらず、二〇分余り超過 申し訳ありませんでした。講演の時にはあくびを一生懸命こらえていた人が多かったようにお見受けしましたが、この要約を読んで、これはもしかしたらいい話だったんだなあ、と思い直していただければ幸いです。ございます。なお、この講演は近刊予定の著作 *Dickens and the Spirit of the Age* の一部です。

〔講演要旨〕

一八四二年六月、ディケンズはアメリカから失望してイギリスに帰って来る。アメリカの道徳、政治、風俗に幻滅したのである。彼の頭の中にあつた階級差別のない民主主義の國、独立独行の精神の故郷、というイメージは現実によって脆くも打ち砕かれた。階級に縛られたイギリスの方が社会的に、政治的によりよいものだとかつたといふのではない。ただ、依然として土地を所有する貴族階級が権力を掌握し、定義のはつきりしない「ジェントルマン」という概念が幅を利かせていたこの國は、國民の自由を謳つ憲法を持ちながら奴隸制という暗い影を持つアメリカとは異なり、少なくとも彼にとって慣れ親しんだものではあつた。

おそらくディケンズはアメリカ人を厚かましい連中だと考え、ジェントルマンとは思わなかつたであらう。しかし、「ジェントルマン」は彼を悩ませた問題だつた。それは自身自身がジェントルマンとして認められるかどうかが怪しいものだつたからであり、かつ、広く世の中で経済秩序の変動により、誰がジェントルマンで誰がそうでないか、ということがはつきりしなくなつたためでもあつた。この問題は初期の『ピックウィック・ペイパーズ』と『骨董屋』に於いては、ロンドンや北部の工業地域が総じて避けられているために、特に突つ込まれていない。前者は過去のものとなりつたあつた駅馬車の時代に設定されており、主として田舎の安定した経済秩序を背景に物語が展開する。後者はロンドンから

の逃避が話の軸になつており、ネルと彼女の祖父が通過するブラック・カントリーに於ける社会不安や産業社会の変化に対する言及はあるものの、小説は象徴的に田舎の村で終結している。

これが一八五〇年代の小説になるとアクセントが異なってくる。書簡やジャーナリズムを読むと、英國社会の現状とジェントルマンの運営する議会の沈滞ぶりにディケンズの苛立ちが増して行くのがよくわかる。彼は社会全体の腐敗がフランス革命のような混沌につながることを真剣に恐れていた。（五〇年代末にこの問題は『二都物語』で追求される。）『荒涼館』や『リトル・ドリット』が扱つのは古い土地持ちのジェントリー（デッドロック家とバーナクル家）によつて直接支配されているか、間接的に悪影響を受けている英國である。このおつにすました英國は労働者階級の貧困や彼等の劣悪な教育体制に注意を払わなかつたのと同様に、新しい、「特別の階級に属さない」、自力で出世した人々（ラウンズウエルとドイス）のエネルギーを愚かにも無視した。ディケンズはこの新しい経済精神のいくつかの側面（少なくともペンサム流の解釈）を『つらい時代』で手厳しく批判しているが、ドイスなどの、古いジェントルマンの枠に入らない、自力でのし上がってきた人たちが社会に吹き込む新しい活力を肯定的に強調した。職を捨て、懐手で暮らすジェントルマンになつてしまふ『大いなる遺産』のピップはドイスの対極に位置する人物である。

ハーナード・シヨーが一九二〇年代に喝破したように、ディケンズとマルクスにはヴィクトリア朝のロンドンに住んでいたということ以上の共通点がある。二人とも新しい社会の鋭い観察者であり、その社会を階級という観点から分析したのだ。しかし、シヨーの力説したディケンズの「革命的な」側面（そして『リトル・ドリット』の左翼的解釈）にもかかわらず、マルクスとディケンズの階級分析には大きな隔たりがあることは記憶しておかねばならない。マルクスはブルジョワとプロレタリアの不可避的な、そして究極的には実りある対立関係を信じていた。ディケンズは中流階級に対してより柔軟な態度を見せ、そこに将来の希望を託していた。マルクスが下層中流階級（ディケンズが生まれた階層）はその運命共同体である労働者階級に埋没するだろうとしたのに対して、ディケンズはそれこそがブルジョワの多様性と生命力を定義するものと考えた。ディケンズはマルクス主義的な意味での革命家では全くなかったのである。彼の信じたものは（デイヴィッド・コパフィールド、ラウンズウェル、ドイスなど多種多様な人物によって定義された）能力主義、進取、自助の精神だった。ディケンズは、ジェントルマン理念はイギリスの民主主義、産業、風俗に決定的な損傷を与えたと考えていた、と言ってもよいだろう。しかしそのことから、ディケンズの考えとマルクスの分析（あるいはマルクス主義の歴史家や文芸批評家の階級観）とが同じである、と言つことは出来ない。

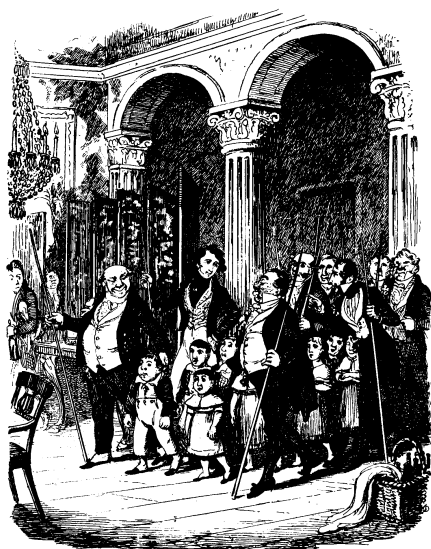
ディケンズの小説に見られる中流階級は弁護士、商人、小売店主、文筆家、技師、事務員などを含む幅広く、柔軟なものである。その上部は極めて裕福な人々、下部はやりくりの苦しいボブ・クラチットのようなしがたない事務員や、技術を持った職人たちで構成されていた。しかし彼らはお互いに、世間的な信用を守ろうとする意識と勤労の倫理によって、結ばれていた。これは広いそして広がりつつある階級で、ディケンズが英国の将来を託したところの能力主義の基盤を構成する階級であった。その能力主義の英国とは、彼自身を、彼の苦闘と勝利を、大寫しにしたものだった。

能力主義者の下級事務員の息子だったディケンズは、自身自身の息子たちに上級事務員職の有難味を吹き込んだ。父親の思慮の無さを見て育った彼はそれを反面教師にして収支を合わせることの必要性を身にしみて覚えたかもしれないが、息子たちにはやはり安全な事務職を求めさせたのだ。一八五〇年代の末期、すなわち彼がイギリス社会の階級性を批判していた丁度その頃、彼は自分の上の息子たちを着実な、冒険性のない仕事に就けようと骨を折っている。例えば、長男のチャーリーを自分のドイツの出版社であるライブチヒのタウフニッツに送り、ドイツ語および国際間の取り引きの知識を得させるようにした。『大いなる遺産』の結末で、ピップに救いをもたらすのはクラリカー社に対する投資と、ハーバートがカイロに職を見つけてくれたという事実であることを思い出してもらいたい。そこではピップは「悲しみを知り、思

慮深くなった」男であると同時に、立派な職を持つサラリーマンでもあるのだ。歴史家の中には、例えば、非常に影響力のある *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit* (1850-1980) を著したマーティン・ウイナー (Martin J. Wiener) のように、ディケンズは一九世紀半ばの商業・産業精神に対する文壇からの攻撃の一翼を担っていたという見方をする人たちがいる。しかし、彼等はドンビーやグラドグラインドの抱く経済観念に対するディケンズの批判を(商取引、蓄財などを含む)資本主義の習俗全てに対する全面攻撃だと取り違えているようだ。ディケンズを特徴づけるのは、彼の創り出した非常に多くのキャラクターがきれいな話を話したり考えたりする(ちなみに、この優雅な趣味が多くの一八、二〇世紀のイギリス小説をだめにはしていないだろうか)のではなく、実際に汗を流して働いているという点である。最終的に、ディケンズの階級観は彼の労働観、勤労を通じての自己実現に対する彼の信念に依存する。ディケンズは階級闘争を歴史を動かす力とも見ていなかったし、ヴィクトリア朝社会の変化を「イギリス文化」にとってマイナスのものとも考えなかった。

今世紀後半の国勢調査に基づくデータを人口統計学者や政府関係者が消化しつつある現在、階級というものの従来の定義を見直さねばならないのは明らかだ。中流階級は極めて流動的なものであり、それは専門職を持つもの、商業に携わるもの、職能のあるもの、大学教育を受けたもの、商店主、そ

してジェントルマンを含む。私の考えでは、階級という概念について、マルクスが間違えていたところをディケンズはちゃんと正しく把握していたのである。



一九九九年度春季大会

Spring Conference 1999

研究発表

司 会 梅 正 行

今回の春期大会は、天候にも恵まれ、会員、非会員、ディケンズを研究する人、楽しむ人、イギリス小説を研究する人、楽しむ人と約百名に近い参加者を得た。詳細はお二人の要約をご覧いただきたい。

その昔、感じたことがある。仙台には仙台のディケンズ、東京には東京のディケンズ、名古屋には名古屋のディケンズ、京都には京都のディケンズ、広島には広島のディケンズがいるのではないかと（この地名に他のどこの地名を入れてもよい）。ところが、しばらくディケンズ・フェロウシップの大会の研究発表やシンポジウムを聴きに春と秋、あちらこちらの大学に出かけているうちに、その会場が、自分の通っていた大学のある地域でも、自分の勤めている大学のある地域でもないのに、会場を包む地域を地元とする方々の口にされる内容の中に、妙に自分の関心あるいは無関心と共通するものが見えて、驚きを覚えるようになった。

ディケンズ・フェロウシップの会員の数だけディケンズが

いるのも妙だし、反対に、日本全国別々のところにいながら「ディケンズと」というテーマで、すぐに話を通してしまつのも気持ちが悪い。ひとり作品を読んでみると、やたら間違つ。といって集団で作品にあたれば文学から密やかな楽しみが消える。

以上、地域にかかわる諸問題が気になっていたのに加え、もちろん読み手の世代の問題もある。このふたつは、自分としてはかなり重要と考えていたのだが、今回のお二人は、そのふたつを難なく超えて、どこにも係留されていない意味で不思議な発表をされたような気がする。

西垣さんや松本さん、それにお二人に近い年代の方々の研究の方向が気になるのは、その言葉がいつかさらにわかりやすくなつた時、地域も世代も超えたディケンズ論が大挙出てくると待ちこがれているからだ。それを自分が理解できるかできないかはさておくとして。



逆転の構図 *Great Expectations* における

病と癒し

The Composition of Reversal: Disease and

Healing in *Great Expectations*

西垣 佐理

ディケンズの小説には『リトル・ドリット』のアーサー・クレナムや『互いの友』におけるコーズン・レイバーンなど、自らの精神の安定と癒しを求める男性たちが数多く登場するが、その時の癒し手は通常であればエイミー・ドリットやリジー・ヘクサムといった女性たちが担っている。『大いなる遺産』において、ピップが病に倒れる場面は彼のアイデンティティの再生や確定と二重映しになっている。しかしこの重要な場面で彼を看護 (nursing) したのは、義理の兄ジョー・ガージャリーであった。ピップの看護人が男性だったという点には注目すべきものがある。それは女性が看護するのが当然とされていた時代に男女の役割が「逆転」して男性による看護が入り込んだことを意味するからである。本研究発表は、男性の看護を中心に見た病いと癒し、そしてそれによって生じた逆転の構図とその意義について考察を試みるものである。

まず男性による看護について考えるために、作品世界にお

ける「病」と「癒し」がどのような意味をもつのか見ていくことにする。『大いなる遺産』には肉体的病、精神的病、物語に比喩的に語られる社会的病が存在するが、特に社会の病は、社会的・文化的秩序が混乱し收拾がつかない状況を指す。従って、癒しは単に病気の治癒を意味するのみならず、混乱した社会的秩序を回復させるという意味をも含む。つまり、それは社会的・文化的役割としての男女の性分業を固定させることに他ならない。

そのような観点から考えると、ジョーやピップの看護には大事な点が二つある。まず第一点は、彼らの看護がヴィクトリア朝のジェンダーイデオロギーによる性分業の配置を逆転しているということ、そして第二点はこの逆転は実はもう一つの逆転、すなわち人間関係における男女の優劣関係の逆転を元に戻すための試みだということである。一点目に関して言うと、男性の看護がジェンダーの逆転を促すのはヴィクトリア朝社会のイデオロギーを支える重要な柱の一つが男女の性的分業のコンベンションに抵触するからである。ヴィクトリア朝の社会規範から見て、女性はいわゆる「家庭の天使」であって看護は女性の職分であった。それゆえ、男性が看護を行うのは女性が介入できない状態でのみ例外的に許されたことであって、それ以外では男性が女性の領域を侵して看護するのは許されなかったと言えるかもしれない。

ところが『大いなる遺産』においてはその規範構造が崩れている。というのも、この作品には女性が存在するにもかか

わらず男性の看護が行われているからである。そこで二点目について考えてみると、次のようになる。『大いなる遺産』は逆転の構図によって、一見性的分業に支えられたヴィクトリア朝のジェンダーイデオロギーを覆しているかのように見える。しかしこの「逆転」は、実はもう一つの「逆転」を修復し、男性優位の状況を取り戻そうという試みでもあった。その更なる逆転とは、この物語の最初からみられる女性たちによる男性の支配である。それは、ミセス・ジョーとジョー夫妻の力関係や、ピップとハヴィシヤム・エステラとの力関係に見出すことができる。要するに、これらの女性たちに対して男性たちはいずれも劣勢に立たされているのだ。

このような事態は彼女たちがヴィクトリア朝社会の求めた女性本来の役割を果たしていないことを意味し、その結果ある種の「病」を生み出したからだと言えるかもしれない。とりわけ先に挙げた女性たちは、この物語に不自然な関係を作り上げるある種の病人であると言える。このような「不自然な」関係を覆すため、また「病んでいる」女性たちを癒すための手段が「男性による癒し」であった。

この構図を踏まえてピップの行う癒しを見ていくと、彼が自らの癒しの手段としたのは、傷ついた自分を心の問題としてではなく社会的・経済的問題として捉え、遺産獲得による社会的身分の向上だった。だが、金銭による癒しは彼を安定させることはなく、むしろ彼を俗物化させてしまった。そんなピップにとつての癒しとは、女性の愛情ではなくジョーと

の「友情」からなる慰めである。彼の病がジョーという男性の癒しによつてしか克服できないものだったことは非常に重要である。彼は自分が神経質な子供に育ったゆえに自分らしさを発揮できなかったと確信している。キャロル・クライストは「男性性」(masculinity)がヴィクトリア朝では重要視されていたにもかかわらず、当の男性たちはそれを発揮できないでいたと指摘する。そのような視点から考えると、ピップにジョーの癒しが必要だったのは、ジョーが男同士の友情という名のもとに、ピップが自分らしさを発揮できる相手だったからに他ならない。ジョーの癒しは彼らが互いに慰めあう構図を生み出し、そしてこの互いの慰めがピップの行う看護になった。ピップの癒しはミス・ハヴィシヤムそしてエステラとの関係に見出すことができる。彼は「慰めと許し」でミス・ハヴィシヤムを、そして「愛情と友情」でエステラを間接的に癒したと言える。またジョー自身も、ミセス・ジョーの死、そしてピディとの結婚によつてそれまでの「不自然な」力関係が元の「健全な」力関係に戻る。このように、彼らは自分たちの行う看護を通して、それまで逆転していた男女の力関係を覆し、父権制社会の一員として迎え入れられたのだ。

『大いなる遺産』はヴィクトリア朝のエトスを逆転しようとした物語である。そこに男性の看護というとモチーフが登場したことによつて、物語の展開はこれまでの男性が支配し女性が従属的に家庭を守るといったコンベンションから大き

く逸脱し、結果として男女の性分業イデオロギーの「逆転」という構図を作り上げるようになったと言えるだろう。

ピップは自分の人生の

主人公になれるのか

精神療法の観点から

Can Pip Be the Hero of His Own Life?

A Psychotherapeutic Analysis

松本靖彦

ディケンズは文字どおりの孤児ではなかったが、一八五八年五月二八日付のホッグ夫人宛の手紙にみられるように、時折自分を親に見捨てられた子どものように感じていたと思われる。その手紙で描写されている「どこかで、ひとりぼっちで、この瞬間も泣いている」孤児の男の子は恐らくディケンズ自身の姿でもある。とすれば、彼はその時点で「親に見捨てられた」古傷を癒しきれていなかったと思われる。彼の子ども時代の最も苦痛に満ちた部分、彼が直接対決することを避け、敢えて多くを語らなかつた過去の心の痛みは、彼の中

で生き続け、孤独で誰の庇護も受けずに哀しみ続ける子どもの姿をとって立ち顯れてきた。この孤児は彼の心のどこかに仕舞い込まれたまま疼きつづけているのだが、この段階では彼自身、告白するようになり、彼はその「見捨てられた」男の子と出遭い、手をとって安全な場所へ連れ出す術を知らないでいる。

『大いなる遺産』の中心人物、親に先立たれた孤児ピップも「見捨てられた」子どものひとりである。彼は親のいない哀しみや寂しさについてはほぼ完全に沈黙しているが、自身自身に関する彼の最初の記憶が、奮えて泣き出している自分の姿だったことからみても、また姉や親戚から身体的にも精神的にも虐待されることが日常化していた様子からしても、ピップの現実にはディケンズの手紙に出てくる「どこかで、ひとり泣いている」孤児の姿に重なり合うものだったに違いない。

ここからここまででは紛れもなく自分なのだ、という心の境界線、「私は私」「あなたはあなた」という、その線引きが安定していることが、精神衛生上、望ましいのだが、ピップの心の境界線は、大人たちによる虐待によって、幼い頃から日常的に侵犯されていた。そのため彼は、自分の人生の主導権を握ることを十分に学習することができず、彼の人生は外部からの侵犯を受け易く、他の人間に乗っ取られ易い性質をもつようになってしまった。自分を変革してくれるはずのプロットに、ピップが自分自身を委ねていくうちに、彼自身の人

生は他者の間接的な自己実現のために乗っ取られ、盗まれていくのである。

また、ピップのような生育環境では、「私」という領域の存在価値を認めるのは難しいので、彼は早くから根深い欠損感を自らの内に抱え込むようになっていたと思われる。「今と全く違う生活」にこだわるピップが、何か劇的で、commonなかたちで周囲からの承認を受けたいと願わずにいられないのは、彼の心奥に「自分は顧みられていない」「かまわれない」という実感がずっと尾をひいてきてくることの証左であろう。

エステラを求めることの不毛性をピディーに指摘されたとき、ピップは「自分は誰かに、あるいは皆に虐げられている」と感じ、ひとりの「虐げられた子ども」の感情に舞い戻っている。彼の内にも虐げられ、「ひとりぼっちで、泣いている」孤児としての彼自身が仕舞い込まれているのだ。

ピップはエステラとの絆に、自分自身からの「救済」の可能性を賭しているのだが、本当に救われなければならないのは、彼の中にある、その子どもなのである。なぜなら傷ついた子どものピップこそが、その後のピップの深刻な欠損感の出所であり、彼の人生を最も深い所方向づけた張本人だから。そこで、彼の人格的成長の目安となるふたつの問題点をすなわちピップが、乗っ取られた人生を自分の手にとりもどし、自分の人生の主人公になれるかどうかということ、また彼が「私は私」「あなたはあなた」という自分自身の境

界線を引き直す事ができるかどうかということ。これらはいずれも、彼が「その孤児」を安全な場所に導いてやれるかどうかという点にかかってくる。

この、自分の中に棲んでいる「子ども」とどう折り合いをつけるか、という問題は、とりもなおさず近年の精神療法の実践におけるひとつの焦点でもある。一九六〇年代の終わりに、アルコール依存症者の子どもが初めて注目されて以来、嗜癖や児童虐待の問題と取り組む過程で浮上した、ひとつの回復モデルが、七〇年代八〇年代を経て、「内なる子ども」という概念のまわりに結晶化してきたのである。

『大いなる遺産』の結末部分においては、ピップと彼自身の「内なる子ども」との出会いが、明確に描き出されている。もはやひとりぼっちでもなく、泣いてもいない子どものピップの出現は、大人のピップが、欠損と侵犯に方向づけられた自分の過去と折り合いをつけ始め、再び自分自身の人生を取り戻し始めている事を表わしている。子どものピップを連れ出して、「いろいろな事を話し、お互いに完全に分かり合った」と語る大人のピップは、事実上、自分自身を丸ごと受け止め、抱擁しているのである。

『大いなる遺産』の二つの結末のうち、「私は私」「あなたはあなた」という線引きにおいて、より成功しているのは「二つ目の結末」におけるピップの方である。彼はもはや他者を取り込んだり、他者に侵入されたりせず、一人で自分の人生と向き合っているからである。「自分自身の境界線」の

揺らぎは完全に終息している。

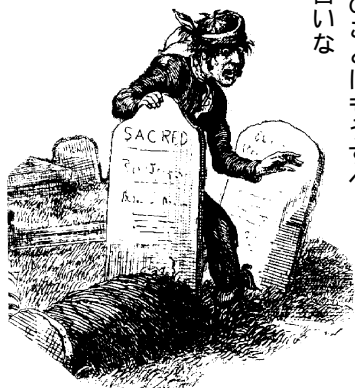
一方「二つ目の結末」において支配的なのは境界線の量しである。そこではピップの心象風景と現実の世界は融合し、エステラもピップの世界に溶け込み、既に「トップ化」されている。彼が見捨てられも、傷つけられもせず、孤独でもないという、彼を庇護する安全な空間が出来上がっていて、それは彼のナルシズムに塗り込められた世界でもある。

非現実的な自己実現の夢から覚め、いわば「素面」になった感のある「ひとつ目の結末」と、ナルシズムへの耽溺に舞い戻っている「二つ目の結末」は、精神療法の現場でよくみられる「覚醒」と、その「揺り戻し」というプロセスにも似ている。

このパターンは、「(母を) 怨んでいない」と言った直後に、「(母の仕打ちを) 忘れはしない」と断言するディケンズの態度や、「エステラとのことはもうすべ

て終わったんだよ」と言いながら、彼女の面影を追っ

ているピップの態度にも通ずる、極めてディケンズらしいものである。



シンポジウム

「後輩作家から見たディケンズ」

Dickens in the Eyes of the Later Novelists

司会 荻野昌利

今回の大会が名古屋の中京大学で催されるということもあって、当地在住の会員最古参の私に計らずもシンポジウムの企画と司会のお鉢が回ってきてしまった。が、ご承知のように、私はどう考えても正統的ディケンズジャンではないし、お引き受けるにさいしても特に成算があったというわけでもない。お受けしてからあれやこれやと考えたあげく、今回のタイトルによりやく辿りついた次第である。このようなテーマを着想した理由は、ひとつには私がいつもディケンズをいわばアウトサイダー的な視点から眺めていたということ、つまり一九世紀後半の小説家たちを研究しているときに、作品中にさまざまな形で姿を現すディケンズにしばしば間接的な形で接してきたことにある。私の関心と呼ぶテーマは、例えばG・エリオットやヘンリー・ジェイムズのような作家がどのようにディケンズを捉え受容していたかということであった。ディケンズのような偉大な作家に対しては世代的に近ければ近いほど、その評価には賞賛・尊敬だけではなく、個

人的な嫉妬・羨望と反感がつきまとうことであろう。それが時代とともに個人的な感情が浄化されるようになって、本當の意味での作家の評価が定着するようになる。つまりそのような評価のなから、ディケンズのもうひとつの姿が浮かび上がってくるのではないか、それもディケンズの理解に寄与するものとならないだろうか、そう考えたのである。

今回は、そのような前提に立つて、ディケンズと個人的にも交流のあった後輩作家トロロフ、一世代遅れて登場してくるG・エリオット、そして遙か後世代の異邦人作家コンラッドと、多少時代が前後し、しかもディケンズに作品的にも心理的にも強いコミットメントを持った作家を三人、司会者の独断で取り上げ、それぞれの作家の見たディケンズ像を専門の立場から自由に論じていただくことにした。いささか牽強付会めくが、このような従来のシンポジウムと視点を異にする企画もたまにはあってもよいのではなからうか、というのが私の言い訳である。



トロロフから見たディケンズ Trollope and Dickens

齋藤 九一

トロロフの第四作目の *The Warden* (1855) を世間的な意味での彼の最初の成功作とすれば、ディケンズの *Pickwick Papers* (1836-37) に遅れること約二〇年となる。その意味ではトロロフをディケンズの後輩作家と言つことは可能であろう。「トロロフから見たディケンズ」を考えると、それはトロロフのテクストの中にディケンズを捜すということになるが、資料としては、トロロフの小説、手紙、自伝および批評文がある。

まずトロロフの小説の中のディケンズへの言及だが、ここでは初期の三例のみを取り上げる。まず、最初の作品 *The Macdemons of Ballycloran* 第五章に *Nicholas Nickleby* の言及があるが、これは作品内の出来事と同時代の人気作品として出されただけで、特に *The Macdemons* と主題的に関わっているとは思われない。次は、おそらく最も有名なもの、*The Warden* の第一章でディケンズを Mr. Popular Sentiment として批評しているものがある。その文は、*“Mr. Sentiment is certainly a very powerful man, and perhaps not the less so that his good poor people are so very good, his hard rich people so very*

hard, and the genuinely honest so very honest.”とか、あるいは
“The artist who paints for the million must use glaring colours, as
no one knew better than Mr. Sentiment...”や言われどおじ、ディ
ケンズの力強さは誇張された人物造形や文体から来ていると
トロロフは見ている。しかしその一方で、“Perhaps, however,
Mr. Sentiment’s great attraction is in his second-rate characters. If
his heroes and heroines walk upon stilts, ... their attendant satellites
are as natural as though one met them in the street...”やも
言っていて、ディケンズに見られる誇張や理想化を揶揄する
とともに、全くそれとは逆の、副人物によく見られる自然さ
を指摘した言葉が注目される。ただし、この副人物の自然
さ・不自然さについては、微妙にニュアンスの違い言い回し
がトロロフの他のテクストにあるので後述する。最後に、ト
ロロフの *The Three Clerks* では、3種類の言及がある。まず、デ
ィケンズの登場人物をそのまま自作品に取り入れるもので、
Nicholas Nickleby の仕立屋 Madam Mantalini、*Martin*
Cuzzlewit の助産婦 Mrs. Gamp が *The Three Clerks* の挿話に登
場する。次に、作品の全体的な主題に関わるのは、第一章に
おける Circumlocution Office (*Little Dorrit*) への言及である。
The Three Clerks では通称 Weights and Measures というお役所
が登場し、これが Circumlocution Office の正反対の非常に能
率のよいお役所である。ディケンズの包括的なお役所批判に
対抗して、郵政省の職員でもあったトロロフが、三人の若い
公務員を主要人物として、公務員であるがゆえの競争や誘惑

に対するそれぞれの身の処し方を、お役所の内情をよく知る
者の視点から描いている。最後に、反社会的な悪人のタイプ
を論じる箇所では、*Oliver Twist* の Bill Sykes が引き合いに出
される。Bill Sykes は境遇ゆえに選択の余地なく悪人である
のに対して、トロロフが描く Undy Scott は貴族の子弟で国会
議員でもありながら地位を利用した悪事を行い、主要人物の
一人である有能な公務員を破滅の道に誘う。Bill Sykes 的な
一目でそれと知れる悪漢ではなくて、紳士という社会的地位
を持ち、それゆえに一層極悪な悪人を描いたところにトロロ
フの自負があるだろう。

手紙におけるディケンズへの言及の例としては二つの点を
取り上げる。まず、ディケンズの一八六七、六八年のアメリ
カ旅行をめぐる手紙は、ディケンズに対するトロロフの微妙
な距離感を暗示する。Charles Kent 宛の手紙で、ディケンズ
晚餐会の幹事役を「喜んで」引き受けると書いたトロロフ
は、Mrs. Elliot 宛の手紙では「自分は特に（ディケンズを取
り巻く）仲間ではないが、（幹事役を）頼まれたので断れな
い」といっている。トロロフはこの頃ディケンズ
に少し遅れて渡米することになるが、A.H. Layard 宛の手紙
では、自分のアメリカ行きは国際郵便協定の交渉が目的で
「朗読で金儲けをする」ためではないと言って、暗に現在渡
米中のディケンズを揶揄している。そう言いながら、興味深
いことに、翌年の四月二二日にディケンズがニューヨーク港
を離れようとしている船に、別の船でイギリスから到着した

直後のトロロフがあわただしく見送りに駆けつけてディケンズをたいそう感激させるという一幕がある。次に、George Eliot宛の一八七二年の手紙で、Forsterの『ディケンズ伝』について、トロロフは、「不快だ」(distastful)と言っている。彼によれば、「ディケンズは力強く、才気があって、ユーモラスで、多くの点で、賢明な人であった」反面、「非常に無学で、厚がましく、自分自身にも、また、取り巻きの人々にも、自分が神のような存在であると思ひ込んでいた。ディケンズは決して英雄として称賛できる人ではなかった」という。手紙という媒体ゆえの率直な言葉と言えるだろう。

最後に、自伝および批評文における言及だが、まずディケンズ追悼文でトロロフは、ディケンズの作中人物たちは、まるで「我々の親密な友人」のようであると言いながら、一方で、ディケンズの人物はどんなに不自然でも、その力強さによって、「第二の自然(a second nature)」を作り出すのだと述べている。トロロフは自伝でもディケンズの登場人物について触れ、あたかも親しい人間のように感じられるが、自然な人間ではないと言っている。そして最後に、ディケンズの文体について、「ギクシヤクして慣用的でなく、規則を無視して作り出されたもの」(jerky, ungrammatical, and created by himself in defiance of rules)で、決して称賛できないが、そのような言葉を手段として、ディケンズが読者大衆の心を満たしたことを、正直に認めざるを得ないと言っている。このトロロフの批判的な言葉は、意図に反して、ディケンズの長

所を逆の方向から思いがけなくうまくとらえていると思われる。つまり、ルールを無視したギクシヤクした文体や人物造形にも「かかわらず」大衆の人気がある、とトロロフは言いただだが、我々の観点からすれば、「それにもかかわらず」ではなく、まさに「それゆえに」である。すなわち、ギクシヤクしたように見える文章で読者の心に強い印象を与えるのは、まさに、ディケンズの活発な想像力が言葉をねじ伏せるようにして斬新なイメージやメタファーを創造したからである。トロロフも create という言葉を使わざるをえなかった所以である。

『フリーリックス・ホルト』

エリオットはいかに『荒涼館』を
書き直したか

George Eliot's Rewriting of *Bleak House*
in *Felix Holt*

天 野 みゆき

エリオットは小説執筆以前に書いた評論の中で、ディケンズを偉大な小説家として賞賛しながらも、彼の心理描写にも

つと迫真性があれば、と惜しんだ。そして、実際に彼女はディケンズから多くのテーマと技法を借用、吸収し、さらに書き直しても言いつべき作業を行ったのであり、それはディケンズの『荒涼館』(一八五三、以下BHと略記)とエリオットの『フィリックス・ホルト』(一八六六、以下FHと略記)に顕著に表れていると言えるだろう。出自、相続、法曹界の腐敗、「結婚のコードに反した女性」の悲劇というテーマのみならず、物語のテーマと展開を視覚化する技法としての絵画的描写にも見出される類似点と相違点は、両作家の特質を照射し合う。本発表では、ジェンダーと階級の問題がいかに提示されているか、という観点からBHとFHの間テクスト性を探った。

ジェンダーと階級は女性の表象において切り離せない問題である。ヴィクトリア朝の慣習的な意味体系では、女性が男性に対する他者性によって定義されたように、労働者階級は中産階級に対する「他者」として表象された。このような意味体系の中で、一九世紀半ばに急増したいわゆる「転落の女」は女性として、かつ労働者階級の代表(象徴)として、男性/中産階級が支配する社会の中心から追放される存在であった。そして「結婚のコードに反した女性」は当時その多くが「転落の女」に成り果てたことを考えれば、限りなく「転落の女」に近い存在だったと言える。結婚前の私通(Concubination)によってエスタ・サマソンを生んだBHのデッドロック准男爵夫人と、弁護士ジャーミンとの姦通(adultery)によつ

てハロルドを生んだFHのトランサム夫人。ディケンズとエリオットは結婚のコードに反したこの二人の女性の悲劇を通して、彼女たちが実は社会構造を揺るがすほどの脅威となり得ることを示し、イデオロギーによって構築されたジェンダーと階級の孕む危うさを露呈させる物語を書いた。

まず、己の罪を隠して生きる二人の女性の激しい懊惱が美しい肖像画との対比によって描き出されてゆく。デッドロック夫人は肖像画のごとく不動の姿勢と沈黙を守ることで他者を遠ざけ、過去を隠蔽しようとするが、タルキングホーンがその戦略を見破り、同じく沈黙によって彼女に挑む。彼の沈黙の裏に潜んでいるのは権力欲、女性蔑視、上流階級への憎悪であり、二人の闘いは男女間の、そして階級間の闘争とも言える。一方、トランサム夫人の若き日の肖像画は、現在の老いた姿との対照において皮肉な色合いを帯びる。

己の罪は死によってすら償えないと考えるデッドロック夫人の深い罪の意識は、かつての恋人への情熱と欲望が今なお彼女の内に燃えさかっていることを物語り、この意味で彼女はレスター卿を裏切り続ける「姦通を犯す女(adulteress)」である。姦通は、トニー・タナーが『小説における姦通 契約と違犯』で論じているように、結婚という契約を基盤として成り立つ社会における違犯行為である。タナーの言葉を借りれば、ブルジョワ社会において結婚は「全てを包摂し、組織づけ、含有する契約」、すなわち社会の「システム」を維持する構造である。従って、姦通によって既婚女性が社会的

に決定された「妻」というカテゴリーを逸脱するとき、それは社会契約の暫定性を暴露するだけでなく、社会の構造そのものを瓦解させる脅威となる。階級間の境界線の抹殺によって「社会の水門が押し流され、奔流が万物の連帯の機構を破砕する」(40章)という、レスター卿が恐れた事態は彼の最も身近なところから引き起こされたのである。社会的、政治的実権を奪われている女性が秘めたエネルギーの破壊力が、*BH*ではデッドロック家の衰退によって、また*EH*ではジャーミンとハロルドの野望の挫折によって示される。

ただし、デッドロック夫人の物語とトランサム夫人の物語の相違点として、上述したエリオット自身のディケンズ批判を裏づけるかのように、トランサム夫人の心理描写に重点がおかれていること、また、トランサム夫人の苦悩は罪の意識以上に、「女の領域」に閉じ込められた女性の憤りと絶望感であることに気づくべきである。世の中の出来事を含めて、全てを自分の女としての苦悶を中心としてしか見ることのできないトランサム夫人を通して、エリオットは一八三二年の第一次選挙法改正直後の社会における女性の地位と労働者階級の状況の類似性を示唆し、ジェンダーと階級の問題を結びつける。女性ノ労働者階級は男性ノ支配階級に搾取される無力な存在であり、無知の故に自分の未来を展望できず、その苦しみを増大させているのである。

次に、ディケンズとエリオットが「結婚」という契約に集約される社会システムの暫定性と瓦解性を露呈させる一方

で、エスタを通して女性の可能性と希望を示そうとしていることに注目したい。それは、旧約聖書においてモーデカイと共に迫害される同胞を救ったエスタと同じ名前が二つの小説のヒロインに与えられていることからもうかがえる。ただし、*BH*のエスタ・サマソンが完璧に「理想的な女性」像におさまるように見えること、そして彼女にとって最も重要であるはずのウッドコートへの想いと葛藤が語られないことが、エリオットには物足りない点ではなかったのだらうか。*EH*のエスタ・ライアンの物語は、彼女がフィリックスの影響のもとに経験する「内的革命」の物語となっている。

「結婚のコードに反した女性」の物語に見たように、イデオロギーによって割り当てられた役割からの逸脱は社会の基盤そのものに対する脅威となる。だからこそ社会の本質的な変革はやはり割り当てられた役割の逸脱からしか起こり得ない。二人の作家はそう考えたのではないが、ディケンズは、イデオロギーの内部に「理想の女性」としての位置を占めるエスタ・サマソンの社会的アイデンティティの曖昧さを示す瞬間をいくつか創り出している。母親との対面の場面では母と子の役割が逆転し、また、エスタが病氣から回復後イダと再会するとき、二人は互いにとって恋人、母親、子供である。このように深い愛情と共感のもとでジェンダーの境界が曖昧になり、社会的役割の転換や逸脱が起こることがイデオロギーの内部からの変革の道となるのである。エリオットもエスタ・ライアンとフィリックスの関係の中に同じ現象を

描き出す。フィリックスが投獄されたとき、二人の間では無意識のうちにいわゆる男性的役割と女性的役割が逆転するのである。

以上のようにBHとFHの間に見出される対話性は、エリオットのディケンズに対する評価と反応だけでなく、一見全く対照的な特徴を備えた彼らの共通点をも示している。FHは傑作とは言い難いが、後に書かれたエリオットの代表作『ミドルマーチ』と『ダニエル・デロンダ』の方向性を示す点で重要な意味を持つ。エリオットは作家として最も苦悩した一八六〇年代に、当時人気を二分していた先輩作家ディケンズから多くのことを吸収しつつ自分の書くべき小説の可能性を模索していたのである。

ディケンズとコンラッド

Household & Empire

Dickens and Conrad: Household and Empire

木村 茂 雄

コンラッドはあるエッセイのなかで、彼とイギリス文学との最初の出会いが、幼少時に読んだ『ニコラス・ニクルビー』のポーランド語訳にあったと回想している。また彼の書

簡からも、ディケンズへの愛着やその文学テクストに関する詳細な知識が窺える。にもかかわらず、コンラッドに関する近年の比較研究では、ヴィクトリア朝小説、なかでもディケンズの存在が不当に軽視されてきた感がある。

ただしその重要な例外は、一九〇六年に執筆された『密偵』をめぐる批評である。そこでは、ロンドンの象徴的な描写、硬直した官僚制に対する批判、探偵小説的なプロット構成、グロテスク性を強調した典型的な人物像など、さまざまな面で、この小説とディケンズ作品（とくに『荒涼館』）との類似が指摘されてきた。

これらの指摘を受けて、ここで問いたいのは、それではなぜ、コンラッドの作家歴のこの時期に、このような作品において、ディケンズの影響が顕在化したのかという疑問である。その一つの明白な答えは、この作品が、舞台をイギリス本国に据えた、コンラッド最初の長編小説であったという事情に求めることができる。彼の伝記からも、当時まで海や植民地の世界を集中的に扱ってきたコンラッドが、経済的な困難にも迫られ、その作品素材を、イギリス本国の社会に探っていた様子が窺える。そして、このような方向転換を図るにあたり、真つ先に彼のお手本となつたのが、幼少時から親しんできたディケンズだったとしても少しも不自然ではないだろう。また、同時期のコンラッドが、この作品の他にも、同じくディケンズ色が濃厚で、後に彼の最初のベストセラーとなる『運命』に着手している点も注目される。ちなみにその

一場面は、コンラッドが初めてロンドンを訪れた時の体験に基づいているが、同じ経験を扱ったエッセイでは、ディケンズ（『the Great Master』とされている）の創造したロンドンのイメージが繰り返し想起されている。

以上のような材料を総合するなら、一つ目の重要な点として、イギリス社会に不案内であったコンラッドにとって、ディケンズは、この世界を体験したり想像する際の、重要な道案内の役割を果たしていたのではないのか、さらにいうなら、コンラッドはディケンズから、イギリス社会そのものを学んでいたのではないのかという推測も成り立つように思われる。

本発表のもう一つの課題は、ディケンズとコンラッドの作品世界を、HouseholdとEmpireの関係という大枠によって整理することであった。ここで基本的に重要なことは、ディケンズをHouseholdの作家、コンラッドをEmpireの作家とする両極化された見方があるとするなら、それは、両者のテクストの現実には必ずしも支持されない通念であるという点である。両者の作品はむしろ、この二つの世界を重層的に含み込むとともに、その複雑な関係性そのものを主題系の一部としていることも少なくない。

たとえばコンラッドの『密偵』にも、一部分、帝国植民地の要素が影を落としているが、逆に、典型的な植民地小説と目される『闇の奥』や『ロード・ジム』の場合でも、クルツの婚約者の『密偵』やジムの家郷のイメージなど、イギリス

ないしヨーロッパのdomesticな領域の存在やその精神的な価値が、作品世界の裏打ちとして重要な機能を果たしている。つまり、これらの植民地世界の意味は、構造的に、このような領域の存在、あるいはその不在感によって支えられている部分が決して小さくないのである。

コンラッドの『密偵』は、ヒロイン・フローラの人物像、彼女と父の関係、この一家の崩壊の過程、HouseholdとEmpireの二分法を侵す船上での新婚生活等々、ディケンズの『ドンビー父子』の影響を強く感じさせる作品となっているが、一方、このディケンズ作品にも、帝国植民地の要素がさまざまな形で浸透している。それは植民地と本国を往来する登場人物たちや、ロンドンに溢れた植民地の物品などにも明らかだが、そもそもドンビー父子の家＝Houseという言葉自体、家督相続の単位としての「一家」という意味と、世界中に植民地貿易を展開する「商会」という意味をあわせ持っている。また、ヒロイン・フローレンスの二つ目の“home”となるソロモン・ギルズの船具店も、domesticな価値観と植民地貿易の活動が交錯する場として構想されているし、小説末尾では、伝統的な家父長制の縦の家系によって守られてきた一家が、植民地から生還したウォルターという、いわば横から入ってきた新しい要素によって再興されることが予示されている。

他のディケンズ作品について充分検討する余裕はなかったが、もう一つだけ例を挙げるなら、『大いなる遺産』の場合、

ピップの期待していた遺産が Satis House のミス・ハヴィンシャムのものでなく、オーストラリアから潜入してきたマグウィッチの財産であり、ミス・ハヴィンシャムの養女エステラも、実はマグウィッチの実娘であることが明かされると展開などは、Household of Empire の交錯という現象を端的にあらわしている。

ディケンズとコンラッドとは、時代の推移も反映して、作品世界の強調に大きなシフトがみられることも確かだが、しかし二人の作品世界は、その両者ともに「domestic な領域と帝国世界とが必然的に絡み合い、複雑な様相を呈する社会や、そこで生きる人間の営みに対する深い洞察を示している。そして、コンラッドが終生ディケンズに寄せた愛着の一つの重要な根拠も、時には解消しがたい矛盾やジレンマを抱え込んだこのような社会の姿を、巨大な塊として描き出してみせた、ノヴェリスト・ディケンズに対する敬意の念にあったのではないかと思われるのである。



論文の電子化について

An Invitation to Uploading Scholarly

Articles on the Web

松岡 光治

ディケンズ・フェロウシップ日本支部のホームページは皆様の御助力に支えられ、昨年一二月三日に文部省学術情報センターからウェブ上に公開されましたが、おかげさまで訪問者が夏休み前に一万人を突破いたしました。ホームページの内容は次の二〇項目です。新着、挨拶、総会、春季、会報、入会、論文、会議、質問、名簿、年譜、伝記、系図、評価、作品、梗概、文献、翻訳、出版、関連。ディケンズの研究者にとっては基礎的な情報ばかりかもしれませんが、一般の愛好者や専門以外の方には、それなりに重宝がられています。小池先生や松村先生の許可をいただいで御著書から作成した年譜や伝記だけでなく、それ以外の項目でも、我々が意外と忘れてしまっていることをチェックすることができ、会

員にとつても十分に役立つのではないかと思ひます。他にも、ディケンズの電子テキスト、コンコードダンス、映画など、日本支部のホームページから直接アクセスできるようにしてあります。今後の課題はいかにしてホームページを学術的なものにするかです。それはひとえに皆様の論文の電子化にかかっています。これまで電子化されて「論文」の項目にリストアップされているのは二四本にすぎません。現在ほとんどの方がパソコンやワープロで論文を書かれていると思いますので、そのファイルがあれば電子化は極めて簡単です。たとえ手書きの場合であっても、抜き刷りがあればスキヤナーで読み取ることが出来ます。当初は、提供いただきました論文のテキスト・ファイルをHTML(Hyper Text Markup Language)ファイルに、時間をかけて手作業で変換していましたが、現在は変換方法をPDF(Portable Document Format)に変えましたので、十秒たらずでできるようになりました。PDFとはウィンドウズやマッキントッシュやUNIXなど複数のプラットフォーム上で、文書のレイアウトやフォントをまったく同じように表示するための形式です。会員の方がパソコンで書かれた論文を、そのまま形を崩さずにウェブ上で公開できるわけです。PDFファイルを「読む」ためには、Adobe Acrobat Readerが必要ですが、このソフトはパソコンを買った時に標準装備としてインストールされていますが、お持ちでない方は <http://www.adobe.co.jp/product/acrobat/read-step2.html> から無料でダウンロード出来ます。

ただし、PDFファイルを「作る」には、Adobe Acrobat 4.0「を購入する必要があります。ウィンドウズ/マッキントッシュ版ともにアカデミック・プライスで二万円ほどです。このソフトがあれば、自分のコンピュータで作成した論文のファイルをプリントアウトするような感覚で、簡単に電子化することが出来ます。これからのデジタル・パブリッシングの主たる形式はPDFになると言われています。今年から先生が御担当の「会報」はDTP(Desktop Publishing)で作成されてから印刷所に出されますので、大幅なコストダウンとなります。DTPではレイアウトが自由自在ですので、原先生のような職人の手によれば、見栄えをほとんど無限に向上させることが出来ます。今年の「会報」がそのことをはっきり示しているはずですが、そして「会報」が出版されたあと、DTPファイルはそのままPDFファイルに変換され、まったく同じ形でウェブ上でも読めるようになります。学術情報センターは、日本の学会が刊行する学術雑誌のオンラインジャーナル形態による出版を普及・促進させるために、総合的なシステムの構築として、「オンラインジャーナルプロジェクト」(URL: <http://www.nacsis.ac.jp/olj/>)を発足させました。ディケンズ・フェロウシップ日本支部では単独で「会報」の電子化ができましたし、将来的にはオーストラリアの電子雑誌“Jacket”(<http://www.jacket.zip.com.au/welcome.html>)のよびオンラインジャーナルができれば、わざわざ楽しいだろうと思ひます。

PDFファイルは画像のように見えますが、保存も検索もできます。他にも、画像を貼りつけたり、しおり(目次)を作ったり、校正をする場合は、ファイルの一部をコピーしてメモの中にペーストし、修正してほしい箇所を変更するという機能もあります。更に、同じPDFファイルの中でリンクを張ることもできます。例えば、注の番号をクリックすることで瞬時に脚注や尾注へジャンプし、注を読み終わったら、その注の番号をクリックして、またもとの箇所に戻るといったようなリンクです。この機能はもちろん他のウエブ・サイトへのリンクという形にすることで、ホームページ上で生かすことができます。音声ファイルや映像ファイルを張ることもできますので、理想のマルチ・メディア・テキストを作成することが可能です。詳しくは、日本支部ホームページの「論文および研究資料の電子化について」(<http://www.soc.nacsis.ac.jp/dickens/archiv/digitization.html>)を御覧ください。PDFの簡単なマニュアル本としては、『PDFの完全攻略』(福田良一、オーム社、二千円)、『日本語PDF+Acrobat入門』(広田健一郎、エニツト工学図書、二千円)、『インターネットのためのAcrobat/PDF(CD-ROM付)』(トーマス・アーツノ広田健一郎訳、電気大出版局、三千五百円)などがあります。

皆様の論文を他の会員の方に、更にできるだけ多くのディケンズ愛好者の方に読んでいただくために、ぜひ論文の電子化に御協力ください。PDFファイルはOSに関係なく電子メ

ールの添付書類として文字化けさせずに送ることができませんので、わたしの方まで送っていただければ、すぐさま日本支部のアーカイブに収納してウエブ上で公開させていただきます。PDF作成が面倒だと思われる方は、論文のファイル(日本語のフォントはOsakaがAcrobat Readerでは読みやすいと思います。ウィンドウスにはOsakaが標準装備されていないので、できるだけ太いフォントを選んでください)を次のアドレスまで添付書類でお送りくだされば、こちらでPDFファイルに変換させていただきます。(Windows users) j45870a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp, (Macintosh users) matsunoka@lang.nagoya-u.ac.jp

最後になりましたが、日本支部の会員だけに限定されたメーリング・リストにも、ぜひ御参加ください。会員も四〇名を越えました。少なくとも倍以上の方が電子メールを利用されていることだと思います。こちらの方も登録者が増えれば、単なる情報交換だけでなく、海外のメーリング・リスト‘dickens-1’のように、学術的な議論ができると思います。登録は、Subject欄を空白にして、メッセージ欄に# subscribeと記入したあと、dickens-ct@lang.nagoya-u.ac.jpへ電子メールを送ることで、自動的に完了いたします。それ以後の投稿の宛先は、dickens@lang.nagoya-u.ac.jpとなります。御協力のほど、よろしく願っています。

フェロウシップ会員の論文・著訳書

(一九九七 一九九九)

著書

宇佐見太一他 『ブロンテ文学のふるさと』

一九九八 大阪教育図書

宇佐見太一、荻野昌利、廣野由美子、新野緑他 『ウィクトリア朝の小説 女性と結婚』

一九九八 英宝社

川澄英男 『ディケンズとアメリカ』 一九九八 彩流社

西條隆雄 『ディケンズの文学 小説と社会』 一九九八 英宝社

北條文緒 『ブルームズベリーふたたび』 一九九八 英宝社

宮崎孝一 『オースチン文学の妙味』 一九九八 鳳書房

榎本 洋 『アンソニー・トロロプの反英雄的、相対的世界』 『フィクションの諸相』 松山信直先生古希記念論文集』 一九九八 英宝社

榎本 洋 『職人作家と筆記用具』 小林 順、吉田秀生編 『筆記用具のイギリス文学』 5章 一九九八 晃洋書房

小野寺進 『Dickensの狂気 躁暴と白痴の観点から』 『人文社会論叢』 (弘前大学人文学部) 人文科学

金山亮太 篇 第1号 一九九八

「ディックさんの狂気は何を暴いているのか」 『人文科学研究』 (新潟大学 人文学部) 第97輯

金山亮太 一九九八

「演技するディケンズ」 『欧米の言語・社会・文化』 (新潟大学大学院 現代社会文化研究科) 第5号 一九九八

Toru Sasaki, "Hardy and Eliot: A Response", *The George Eliot Review* No. 29 (1998)

Toru Sasaki, "'After a Fashion': An Appreciation" in John Lucas and David Belbin (eds.), *Stanley Middleton at Eighty* (Five Leaves, 1999)

佐々木徹 「1946年以降の英国小説 Amisから Rushdie へ」 『創刊百周年記念号』 一九九八年八月別冊

佐藤真一 「公開朗読台本 *David Copperfield* 研究 その言語と意義」 『駒沢大学文学部英米文学科研究紀要』 第34号 一九九八

志田 均 「ディケンズの見たアメリカ」、関口功教授退任記念論文集編集委員会編 『アメリカ黒人文学とその周辺』 (南雲堂フェニックス) 一九九七年

志田 均 「テクストと欲望」 『ドンビー父子』 試論

「『文芸研究』 (明治大学文学部紀要) 第八十一号、一九九九年

西垣佐理 「『家庭の天使』から『白衣の天使』へ」 『Little Dorritにみる nursingの実践をめくって

『関西学院大学英米文学』第43巻第1号

一九九八

原 英一

『女性による王政復古期劇場の征服について』
『東北学院大学論集(英語英文学)』第89号

一九九八

Eiichi Hara,

“The Absurd Vision of Elizabethan Crime Drama: A
Warning for Fair Women, Two Lamentable
Tragedies, and Arden of Faversham”(Shiron No. 38,
1999)

編 著

Toru Sasaki and Norman Page (eds.), *Wilkie Collins, Miss or
Mrs?, The Haunted Hotel, The Guilty River* (Oxford
World's Classics, 1999)

久田晴則

『The Marshalsea PrisonとDickens』、『JとEの
ソホー』、英宝社 一九九八

松岡光治

『ディケンズと狂気 監禁、群集、記憶、愛
』、『名古屋大学言語文化部・国際言語文化研
究科言語文化論集』第XX巻第2号 一九九八

翻 訳

青木健・榎本洋『文筆業の文化史』彩流社一九九九年5月
『コードル夫人の寢室説法』(1) ダグラス・
ジェロルド著 新潟大学言語文化研究』(新潟
大学 人文学部・法学部・経済学部) 第3号

松岡光治

『革命における愛憎の流動化 A Tale of Two
Cities 』、『名古屋大学言語文化部・国際言語
文化研究科言語論集』第XX巻第1号 一九九八

金山亮太
『コードル夫人の寢室説法』(2) ダグラス・
ジェロルド著 新潟大学言語文化研究』(新潟
大学 人文学部・法学部・経済学部) 第4号

Mitsuharu Matsuka,

“Dickens and Memory” (*Rivista di Studi
Vittoriani* No.7, 1999)

金山亮太
『コードル夫人の寢室説法』(2) ダグラス・
ジェロルド著 新潟大学言語文化研究』(新潟
大学 人文学部・法学部・経済学部) 第4号

松岡光治

『身体/社会の断片化と想像力 Our Mutual
Friend 』、『広島大学英語英文学』第43巻
一九九九年

齋藤九一・青木健『愛の文化史』法政大学出版局 一九九八

松村豊子

『白衣の女』の嘘と野心:M・E・ブラッドン
の重婚小説 重婚小説の方程式(2)』、『津田塾
大学 言語文化研究所報』第14号、一九九八

村山敏勝他 『わたしの欲望を読みなさい』ジョーン・コブ
チエク著 青土社、一九九八

松村昌家

Paul Schlicke ed. *Oxford Reader's Companion to*

会 員 名 簿

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1 甲南大学文学部英語英米文学科

電話078(431)4341

<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/dickens/>

©ディケンズ・フェロウシップ日本支部 この名簿の無断複製・転載を禁じます

氏 名	〒	住 所	電話番号	勤 務 先
<p>PDF版では名簿データは掲載されません。冊子版をご覧ください。</p> <p>会員の方はウェブ上で最新の会員住所録データにアクセスできます。詳しくはウェブ担当理事までお問い合わせ下さい。</p>				

	氏 名	〒	住 所	電話番号	勤 務 先

	氏 名	〒	住 所	電話番号	勤 務 先

	氏 名	〒	住 所	電話番号	勤 務 先

	氏 名	〒	住 所	電話番号	勤 務 先

	氏 名	〒	住 所	電話番号	勤 務 先

氏名	〒	住所	電話番号	勤務先



編集後記

私が雑誌の組版をするのがこれが百数冊目になります。DTPオペレータとしてはプロ並みになったと不遜にも自負しています。しかし、編集の仕事というのはいくらやっても慣れません。反省点も山ほどあります。前任者の青木先生のご苦勞は推測はしておりませんが、今回あらためて実感しました。ともあれ、多くの方々から原稿を頂き、大幅なページ増が実現できたのもうれしいことでした。次号も多数の皆様からのご寄稿を期待しています。本部発行の *The Dickensian* に匹敵する内容を目指していきたいと思えます。今回は多くの方から電子メールやワープロのプリントアウトで原稿を頂き、作業効率が上がりました。もちろん手書き原稿でも何の不都合もありませんので、手書きでもふるってご寄稿下さい。

記事の余白に入れたカットは、私が勝手にレイアウトしたものです。記事の筆者の意図ではありませんので、念のためお断りしておきます。

なお、この号は支部のウェブ・サイトでPDF版で同時に発行されます。本号にモノクロで掲載されている写真もPDF版ではカラーで見ることが出来ます。是非そちらもご覧下さい。(原 英一)

会報 第22号

発行一九九九年一月二〇日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

〒六五八 八五〇 神戸市東灘区岡本 8 9 1

甲南大学文学部英語英米文学科内

電話〇七八(四三二) 四三三四一

印刷 株式会社 東北プリント

〒九八〇 〇八三 仙台市青葉区立町 24 24